

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

保育日誌を活かす～菜園活動～／呉市安浦中央保育所（広島県）

保育日誌をどのように活かして保育の振り返りをしていますか？
また、各クラスの保育日誌を園全体で共有することはありますか？
菜園活動は、大人が提案することも多々ある活動ですが、子どもの発見や気づきを受け止め活かしていくことで、子ども主体の「科学する心」が育まれる取り組みへと繋がります。
今回は、保育日誌や記録から菜園活動を振り返り、保育者同士共有することで、子どもたちの主体性を捉え、支える展開に結び付いた園の実践をご紹介します。



● 菜園活動を通して／5歳児

✦ この芽何の芽？

● 7月17日

7月と8月の5歳児は、給食の野菜くずをスコップで切って土に混ぜて「元気土[※]」を作る作業をほぼ毎日続けていた。野菜くずを混ぜた土にかぶせておいたシートの覆いをはずすと…。

Aちゃん：「何か出ると、何の芽じゃろうか？」
Bちゃん：「モヤシ？」
Cちゃん：「でもこの前から給食でモヤシ食べてないよね」
Dちゃん：「あっ、ピーマンの種がある」
Eちゃん：「（芽を）畑に植えておいて何になるか調べてみよう」

※「元気土」とは、小さくちぎった野菜くずにボカシを入れて、シートで包み、足で踏んだ後、黒土と混ぜたもの。



● 7月25日

野菜くずを混ぜた土にかぶせておいたシートの覆いをのけると、今日も芽が出ている。そこで、芽を畑に移して何になるか調べることになった。

Fちゃん：「今日のメニューにカボチャがあった、これはカボチャの種」
Gちゃん：「植えたらカボチャができるかな？植えてみよう」

目の前にある芽がカボチャの芽だとは気付いていない様子。

● 7月27日

5歳児：「オレンジの皮があるからこれ（カボチャの種）はオレンジの種と思う、植えてみよう」
Hちゃん：「僕はこれ（ブロッコリーの茎）を植える」
Iちゃん：「僕はこれ（収穫しそびれたジャガイモ）を植える」

この頃から、野菜くずの中にある種や茎や皮を植えてみたいという子どもが増えていた。



● 7月30日

17日に畑に移した芽が大きくなっていた。25日に植えたカボチャの芽が出ていた。

● 7月31日

野菜くずを混ぜた土にかぶせておいたシートの下の芽を畑に移している時、前に移し替えた芽から出ている葉と側に植えてあったカボチャの葉を見比べた5歳児

Jちゃん：「あっ、葉っぱが同じじゃ、ということはこの芽はカボチャになるのかな？」

Kちゃん：「なんで野菜くずの土にカボチャの種があったんかねえ？」

Lちゃん：「給食でカボチャ食べたよ！」

✦ 種を育てたい

● 野菜くずを埋める時のこと

Aちゃん：「シートの下の芽は畑に移そう」

Bちゃん：「この前の芽がまた大きくなると。葉っぱの数は1, 2…5枚じゃ」

Cちゃん：「隣のカボチャと同じ葉っぱじゃ。やっぱりこれはカボチャじゃね」

Dちゃん：「今日はスイカを食べたね、スイカの種を植えたらスイカの芽が出るよね」

Eちゃん：「スイカの種を植えてみよう」

Fちゃん：「あっ、トウモロコシの種もある、植えてみよう」



● 8月6日

野菜畑の出来事をクラスのみならず共有するために、野菜切り当番がその日あったことを報告した。また、種をトレーで育て部屋の前に置くことにした。

部屋の前においたトレーの様子へも関心が高く、土から出ている芽を見て子どもたちが集まってきた。



● 8月7日

種から育てたトマトを収穫した日のこと

Gちゃん：「中を見たい！」

Hちゃん：「種がある、（植えた種と）同じ」

Iちゃん：「取って、（また）植えよう！」

● 8月10日

春に植えたメロンやスイカが大きくなり収穫した。子どもたちの前に並べ、匂いをかいだり触ったりした後、包丁で切ると歓声が上がってみんなで味わって食べた。メロンの味について「甘い」、「おいしい」、「コーヒーの味」など感想を言っていた。子どもたちは、その種をまた植えてメロンを食べたいという。この思いを受け止め、子どもたちと生長を楽しみにしたい。

✦ 植え

給食で出たソーメンウリの種を見付け、洗って取って置いたメロンやスイカ（保育所で採れた）と一緒にトレーに植え、保育室の前に置いて観察することにした。

8月3日に植えた種の様子を見て「大きくなると」と嬉しそうに言う。

● 8月17日

3日に植えたスイカ・トウモロコシ、10日に植えたソーメンウリ・メロンの芽がグングン伸びて倒れそうになっていた。

保育者：「トレーの野菜の芽どうする？」

Aちゃん：「狭いから大きい所へ移してやろう」

根っこから栄養を取り入れることを理解していることや大切にしたい思いから、丁寧に移していた。移しながら根に種が付いていることに気付いた5歳児がいた。

Bちゃん：「根っこに何か付いているよ」

Cちゃん：「あつ、種じゃ」

Dちゃん：「中が見える、開けてみよう」

Eちゃん：「何も無い」

Fちゃん：「ミミズが食べたんじゃ」

Gちゃん：「でも、土にミミズはおらんかった（いなかった）」

Hちゃん：「大きくなるときの栄養になったんじゃないの？」

Iちゃん：「空の種を植えてみよう」

保育者：「空の種を植えたら、芽が出るかな？」



ほとんどの子どもが「出ないと思う」と答えたが、子どもの試してみたい思いを受け止め、そのまま様子を見ることにした。

✦ 振り返って

- 保育者は、子どもたちの気付きを育むための菜園活動を目指しながら、子どもたちの気付きに耳を傾けることは難しく、野菜の収穫数や大人の知識を伝えることに気をとられたこともあった。しかし今回の実践から、「科学する心」を育むことは子どもの主体性を尊重することに他ならないことに気付くことができた。
- 子どもたちの「芽を見つけた感動から種に気付き種を植えて確かめたい思い」、「メロンがおいしかったから、もう一度みんなで食べるためにメロンの種を植えたい思い」に応えるには保育者の連携や保育の工夫が不可欠だった。
- 子どもたちの気付きに耳を傾け「科学する心」を育むためには、子どもたちの姿や実施したことを日誌に記録していくことや、「それぞれの学年の栽培活動」を共有し、保育者間で話し合いを重ねることの大切さを実感した。
- 畑の様子や5歳児の活動を幼児クラスに発信することで、畑と職員や子どもたちの関係が密になり、保育日誌にも現れてきた。5歳児が7月、8月と毎日土作りをして、畑から伸びた芽やその源の種の存在に気付き、自分たちで育てる取り組みは他のクラスの子どもたちにも影響を与えた。5歳児のクラスの前の栽培トレーの前に集まり、発芽の様子など、気付いたことを伝え合う一人一人の子どもたちの姿に「科学する心」が芽生えていることが分かった。